

「二つ嘆き」でおわさが左にすぎる。そこで耐えて、「一筋に」でふりきり一足出ると、「モシ」と聲をかける。それで「見捨てゝ」で振返り、二つの首を前へ差出す。おわさ近づくを花の井が隔てるのが「御所へ」で、「ぞー」で辨慶が太郎の首を一寸見、信夫の首をぢつと見て、首を振つて泣く。次に下手向き、首を胸に充てゝ抱へ、それが木の頭で、辨慶はうなだれ、首ふりつゝ泣き、最後に泣き上げ、おわさは上手立身で泣き上げ、花の井は下に居て中を隔てる。この見得で幕になる。面白い點は「あこがるゝ」で見せる辨慶の弱々しさと、辨慶が普通花道でやる信夫の首を見ての思入れを取入れた點とで但しそのため幕切の辨慶の動きがせゝこましくなつたのと、花の井が賢女振りを發揮する點とが缺點である。

結局、壽三郎の辨慶は失敗であつた。幕切の技巧の面白さの爲だけに五十分は長過ぎる。眞に研究的な辨慶としては、三忘のない僅か五分の御所三は短か過ぎる。超人から人間への橋渡しの台詞「ほててんがう……」を削つたのは致命傷であつた。この邊りから御所三の新生命は別出せられなければならぬのに。

他に「四谷怪談」があつたが、これは九月の京都南座でやるほど同じ顔觸れの「四谷」を、今一度見た上で一括して批評する。

うそくらぶ

南部太夫が文樂座復歸を機に越路太夫を襲名するが、同時に織太夫は義太夫を、相生太夫は政太夫を、伊達太夫は呂昇を、各々襲名する。